

Title	Knowledge-Beat (ナレッジ・ビート) vol.2
Author(s)	
Citation	
Issue Date	2006-12
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/3775
Rights	
Description	

知識科学に基づく科学技術の創造と実践

Vol. 2
2006冬

Knowledge-

Beat

ナレッジ
ビート

21世紀COEプログラムとは?

日本の大学を世界的研究
教育拠点へ育成するための
文部科学省の重点的支援。

COEとは「Center Of Excellence
(卓越した拠点)」の略です。

【特集】COEの卒業生&学生が登場

知識社会へ挑む!

知のコーディネーターたち

Part1 INTERVIEW

あなたのまちの

「知のコーディネーター」

Part2 VOICE

がんばれ!

知のコーディネーターの“卵”たち

イノベーション教育プロジェクト

COE NEWS

COEリーダーは考える②

世界の地域に 貢献する



知識社会へ挑む!

知のコーディネーターたち

Part1 あなたのまちの「知のコーディネーター」

Part2 がんばれ!知のコーディネーターの“卵”たち

<Part 1>

社会の
うねりの中へ
飛び込め!

あなたのまちの「知のコーディネーター」

本COEプログラムで育成された知のコーディネーターたちは、今日もまちのどこかで活躍している。
今回はその中の2人にスポットをあて、「卒業後の今」を追った。

Interview

File No.1

地域一体で取り組むプロジェクト

小中学生の携帯電話所持に一石を投じる!

浅野 浩央(25歳) ASANO Hiroyuki

北陸先端科学技術大学院大学 科学技術開発戦略センター 研究員
2004年10月入学・2006年9月修了

PROFILE

神奈川県相模原市出身。東海大学文学部卒。JAIST知識科学研究科へ入学した後、携帯電話の安全な利用方法についての研究に取り組む。2006年10月から、JAIST研究員として履修コースのカリキュラム調整や運営にも携わっている。

ー現在のお仕事についてお聞かせください。

現在、私が進める主なプロジェクトは、能美市とJAISTが連携して行っている「モバイルリテラシー教員研修プログラム」です。これは、小中学生の携帯電話使用率が年々上昇している現実を後目に、正しい使い方を指導できる大人がほとんどいないという問題を、地域全体で解決していくための取り組みの一つです。このプロジェクトには、さまざまな人たちが関わっています。例えば、学校の教員や教育委員会の方、能美市役所の方やJAIST職員・学生など、立場も違えば意見も違う方々ばかりです。そのような方たちの意見を調整し、最高のモチベーションを維持しながら、全員の意識を一つの方向へ持って行きプロジェクトを進めることが自分の仕事だと思っています。

ーさまざまな立場の人の意見を調整しながらプロジェクトを進めるというスキルは、どのようにして身についたのですか?

JAIST知識科学研究科には、さまざまなバックグラウンドを持つ学生がいます。私は文学部出身ですが、歴史学や経済学など、自分の知らない知識を持っている人たちがたくさんいるのです。学生何人かでチームを組み、プロジェクト方式で課題を進めていくカリキュラムがありましたが、そこでお互いの知識をぶつけ合い、吸収していくことはとても新鮮でした。そのことが、さまざまな人の立場や知識を取り入れてプロジェクトを進めていくことに役立っていると思います。また、担当教授に同行させていただいて、先生がプロジェクトを進める姿を目の当たりにしてきました。そういった経験も大きな要因の一つだと思います。



複数のプロジェクトを同時進行させるため、毎朝のスケジュールチェックには余念がない。



野々市町で開催された「携帯電話・インターネットと子どもの問題を考える交流集会」では、小中学生の保護者に対してケース講義を行った。

—今後の目標をお聞かせください。

本来、自分は“飽き性”だと思っているので、一つのことを突き詰めていくことは非常に苦手なのですが、常にさまざまなことへの関心は尽きないので、物事を幅広く見渡せるジェネラリストを目指してきました。しかし最近はその中でも自分らしさ、自分の売りとなるものが必要だと思っています。自分の専門、得意分野といえるものを今後は増やしていきたいと思っています。



自然豊かなキャンパスの中、気分転換の散歩中に頭の中が整理されることもあるという。



能美市との学官連携協定の第一号事業として「青少年の携帯電話利用に関する教員研修運営委員会」が発足。その認定式でプロジェクト概要を説明した。

File No.2

アイデアを利益へと変える

「知識財産コーディネータ」を目指す!

三浦 尊裕(30歳) MIURA Takahiro

特許庁 特許審査官補(任期付)
1999年4月入学・2005年3月修了

PROFILE

静岡県静岡市出身。宮城教育大学卒。JAIST材料科学研究科(現:マテリアルサイエンス研究科)へ入学し、博士後期課程在籍中にリサーチ・アシスタントとして本COEプログラムへ参加。技術者と経営者間での専門的な知識、技術をわかりやすく伝える技術開発に挑む。2005年5月から特許庁にて半導体素子に関する特許の審査を行う。



時には何日にもわたって世界中の文献を検索することもある。

—現在のお仕事についてお聞かせください。

特許庁にて、IC・メモリなどの半導体素子に関する特許を審査しています。特許を得るために発明者はアイデアを書類にまとめ、特許庁へ出願します。その出願された書類は、似たような技術や研究が今まで行われていなかったか世界中の文献や論文を検索し、独自性について審査をする必要があります。私はその審査部分を担当しています。斬新な技術であればそのまま特許査定と判断されるのですが、すでに似たような技術が知られている場合、発明者のオリジナルな部分を明確にするため、特許の出願人と何度かやり取りをします。その結果、オリジナルな部分が斬新な技術であれば、特許査定と判断されるという流れになります。

特許審査では、類似の技術を世界中の研究論文・特許文献等のデータベースを用いて調査した上で、誰が見ても納得できるような公正な判断が求められます。複雑なものでは相当な時間がかかる場合もあります。そのため専門分野に関しては、常に技術のトレンドを把握した専門家を目指して仕事を進めています。

—知識科学21世紀COEプログラムに参加して、どんなことが現在のお仕事に生かされていますか?

マテリアルサイエンス研究科で材料科学の最先端の研究に携われたことは、基礎知識として大いに生かされていると思います。また、私は堀プロジェクトにリサーチ・アシスタントとして参加し、研究者と経営者間で、知識や技術をどうすれば分かりやすく伝えられるかという技術開発を行いました。

知識を分かりやすく伝えることの難しさは、現在の仕事でも感じるが多々あります。特許出願において発明者から我々審査官まで書

類が届くには、会社の知的財産部(特許部)や弁理士(特許事務所)など、発明者以外にも何人もの人手を介します。そのため、発明者の真意やこちらの意図などの意志疎通が上手くいかない場合があるのです。堀プロジェクトに参加し、知識・技術の本質部分を伝えることの難しさを経験できたおかげで、発明者の意図を酌むことを常に念頭におきながら特許出願人と対応しています。

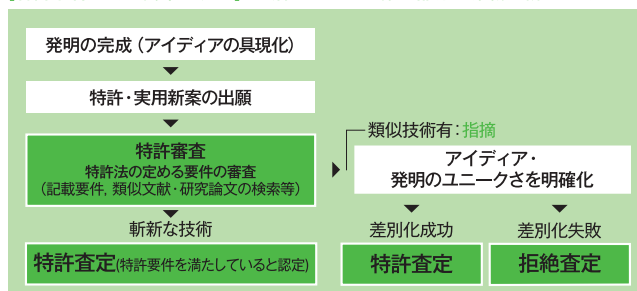
—これからは何を目指しますか?

JAISTで得た「知識」と現在携わっている特許審査の「経験」を生かし、将来は「知識財産のコーディネータ」のプロフェッショナルとしての「弁理士」を目指しています。アイデアを「知的“財産”」という権利にするまでには非常に困難なプロセスがあり、また、権利化できた知的財産を活用する上で幾重もの「死の谷」と呼ばれる障壁が横たわっていることも事実です。さらに、あえて特許等の権利化をせずに秘匿したほうが有利な知的財産(ノウハウ等)もあります。知的財産をどう活用すれば利益につながるか、発明者や企業へアドバイスできるスペシャリストになりたいですね。



JAISTでナノテクノロジーを研究し、リサーチ・アシスタントとして知識科学に触れたことで、自分の選択肢が広がったと語る。

【特許取得までの簡単な流れ】 三浦さんは主に緑色部分の業務に携わっている。



解釈が難しい複雑な発明は、他の審査官の意見を参考に慎重に判断する。

がんばれ! 知のコーディネータの“卵”たち

知のコーディネータの仕事は実に多種多様。
その中で自分にしかできないコーディネート力を身につけるべく、学生たちは今日もがんばっている!

Voice

①出身地 ②出身大学・学部 ③職歴 ④JAIST入学年



知識科学研究科
遠山研究室

吉永 崇史 (30歳)

YOSHINAGA Takashi

- ①大阪府
- ②青山学院大学国際政治経済学部
- ③中央三井信託銀行
- ④2002年

1. 入学したきっかけ

前職で得た問題意識をもとに経営学(組織論)を学ぶため。奨学金で研究に浸れる環境が魅力的だった。

2. 学生生活について

異分野を探索すればするほど学問の壁は厚いと感じている。

3. 今後の目標

経営学に軸を置きつつも、関連領域である科学技術社会論(社会学)・教育学・心理学についてより深く学ぶことで、自分なりの新機軸を打ち出した研究を行いたい。



マテリアル
サイエンス研究科
水谷研究室

Kitsakorn Locharoenrat (36歳)

キツァコーン ロカロエンラト

- ①タイ
- ②Ms of Asian Institute of Technology/
Processing technology
- ④2004年

1. 入学したきっかけ

バンコクで開かれた日本教育フェアにJAISTが参加しており、自分の研究をするための先進実験技術、先端テクノロジーと施設を備えていたから。

2. 研究プロジェクト

光通信などで使われる、ナノスケールの新しい物質の研究をしている。

3. 今後の目標

この材料技術分野を先端科学技術の有望なツールとして証明し、それによって私の祖国の生活の質が向上することを望む。



知識科学研究科
伊藤研究室

柳川 章博 (26歳)

YANAGAWA Akihiro

- ①埼玉県
- ②埼玉工業大学工学部
- ④2005年

1. 入学したきっかけ

友人の紹介で。広い視野を得るという観点から、人類学というものを勉強している。

2. 研究プロジェクト

研究室のパフォーマンス向上を目標に調査している。さまざまな研究室内の活動を見ることから、その糸口を探索する。比較のために、他の研究科のゼミ活動にも参加している。

3. 学生生活について

熊と雪に注意!



マテリアル
サイエンス研究科
寺野研究室

Dodik Kuruniawan (27歳)

ドディ クルニアワン

- ①インドネシア
- ②東京農工大学工学部有機材料化学科
- ④2005年

1. 入学したきっかけ

高いレベルの技術知識、特に高分子材料科学の知識を獲得するため。

2. 研究プロジェクト

主に高分子材料について研究している。研究テーマは「ポリプロピレンの熱酸化劣化挙動に対する不飽和末端の影響」について。

3. 共同研究の感想

一人の知識と能力では限界があるが、共同で研究を進めることでそれを全員で共有できる。



知識科学研究科
中森研究室

千原 かや乃 (27歳)

CHIHARA Kayano

- ①石川県
- ②玉川大学大学院文学研究科教育学
- ④2005年

1. 研究プロジェクト

「ソーシャルイノベーション(社会革新)における知のコーディネータ」を研究している。地域再生事業を社会革新の一環と捉え、その事業をコーディネートしている人を「知のコーディネータ」と仮定し、その役割や資質について学んでいる。最終的には「知のコーディネータ育成モデル」を提案したい。

2. 学生生活について

未知なる分野の探求で日々発見と迷いが生じている。しかし貴重な経験をしていると思う。

知のコーディネータ養成カリキュラムを開発中!

イノベーション教育プロジェクト

目的

●知識社会において、イノベーションの担い手となる人材育成を目指す。

特徴

- 異分野の研究者が集結し、現在2つの研究プロジェクトが進行している。
- 異なる学問分野を学ぶ統合科学技術コースのカリキュラムを開発している。
- 地・学連携プロジェクトを進行させながら、研究教育を実施している。

研究
プロジェクト
1

統合科学技術コースにおける
地域再生システム論等の
カリキュラム開発

研究
プロジェクト
2

ソーシャル・イノベーション



知識科学研究科
宮田研究室

高橋 誠史 (26歳)

TAKAHASHI Masafumi

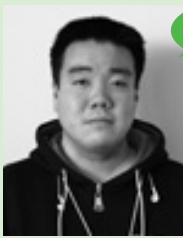
- ①北海道
- ②多摩大学経営情報学部経営情報学科
- ④2005年

1. 入学したきっかけ

CGの先端的な研究が行える体制を求めて入学した。

2. 研究・プロジェクトの感想

研究テーマは、物理現象をアニメーションによって表現することで、物理現象やテクノロジーのバックグラウンドの仕組みを理解する手助けを行うこと。研究方向がリアルさの向上とインタラクティブ性の向上にあり、「人の理解を手助けする」ことに、重要さとチャレンジングな課題性を感じている。



知識科学研究科
梅本研究室

水元 明法 (28歳)

MIZUMOTO Akinori

- ①石川県
- ②大正大学人間学部仏教学科
- ③宗教法人天徳寺副住職
- ④2002年

1. 入学したきっかけ

僧侶は「自信教人信」の文に表されるとおり、「自らを信じ、人を信ぜしむる」ことを目的の一つとする。学問僧としての素養(自らが対象を理解する能力、自らが理解したことを他者に説明する能力)を身につけたいと考え、社会学から哲学、情報科学までを含む学際的な大学院研究科である本学を志望した。

2. 今後の目標

研究とその成果を活かして寺院経営の実務に従事していくこと。必要とされるならば後進の育成にあたりたい。



マテリアル
サイエンス研究科
藤原研究室

井波 暢人 (32歳)

INAMI Nobuhito

- ①富山県
- ②日本大学理工学部
- ③(株)リコー 画像システム事業本部
- ④2003年

1. 研究プロジェクトの感想

カーボンナノチューブの合成とその応用について研究している。扱っている材料がナノサイズなので作製と測定が困難だが、やりがいを感じている。

2. 学生生活について

講義カリキュラムや設備など環境は整っている。あとは本人のやる気だけ!

3. 今後の目標

材料科学分野における情報科学・技術の応用の現状や課題について探求したい。



マテリアル
サイエンス研究科
民谷研究室

塚本 匡俊 (29歳)

TSUKAMOTO Masatoshi

- ①東京都
- ②東海大学開発工学部
- ④2002年

1. 入学したきっかけ

幹細胞研究における新規分化誘導物質探索の新規手法として、チップデバイスを用いた手法があり、所属研究室が該当したため進学を決めた。

2. 学生生活について

統合科学技術コースは文科系研究者とふれあうことでさまざまな考え方を知ることができる。一方で履修科目が増えて負担は大きい。

3. 今後の目標

幅広い視野を持った研究者として、研究を続けていきたい。



知識科学研究科
中森研究室

平松 章男 (42歳)

HIRAMATSU Akio

- ①石川県
- ②秋田大学鉱山学部採鉱学科、北海道大学大学院工学研究科資源開発工学専攻
- ③太平洋炭礦(株) 釧路鉱業所、気象予報士(現職)
- ④2003年

1. 入学したきっかけ

知識科学研究科に技術経営(MOT)コースが開設されることを知って。

2. JAISTで得たもの

気象と産業の関わりを学ぶ「産業気象学」は21世紀の知識情報化社会には不可欠。知識科学によって気象予報を社会に役立てる研究は、気象予報士仲間から協力的に情報提供が得やすい。北陸地域の気象予報士が結束するきっかけをつくるのに役立っている。



知識科学研究科
遠山研究室

高木 里実 (29歳)

TAKAGI Satomi

- ①岐阜県
- ②拓殖大学商学部
- ④2006年

1. 入学したきっかけ

野中郁次郎氏の著書『知識創造企業』『ナレッジ・イネープリング』を読んで感銘を受けたことから。

2. 研究プロジェクトの感想

「分野を超えた知識創造のリーダーシップ」を学ぶ必要性をととも感じる。

3. 学生生活について

異分野の学生と議論ができることが何よりの財産だと思う。

研究目的

- 複数の学問分野にかかわる問題を発見・解決できる人材育成カリキュラムの開発を目指す。

現在の活動内容

- 内閣府との連携による「地域再生システム論」講座の実施。
- 本COEイノベーション研究の内容を、統合科学技術コースにおいてイノベーション教育のカリキュラムとして実施することを検討。

研究目的

- 地域イノベーションを推進する人材育成プログラムを開発する。

現在の活動内容

- 自治体(能美市・加賀市・七尾市)との連携プロジェクトを進行させながら、研究教育を実施。
- JAISTフォーラム2006「北陸!地域再生シンポジウム」の内容を検討。

プロジェクトメンバー

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 代表者 | 近藤修司 / 知識科学研究科教授 |
| 三宅幹夫 / マテリアルサイエンス研究科教授 | 小林俊哉 / 科学技術開発戦略センター助教授 |
| 高木昌宏 / マテリアルサイエンス研究科教授 | 中森義輝 / 知識科学研究科長・教授 |
| メンバー | 荒井誠也 / マテリアルサイエンス研究科 博士後期課程 |
| 亀岡秋男 / 知識科学研究科特任教授 | |
| 井川康夫 / 知識科学研究科教授 | |

プロジェクトメンバー

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 代表者 | 山本和義 / 先端科学技術研究調査センター長・教授 |
| 近藤修司 / 知識科学研究科教授 | 碓谷 勝 / ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー研究員 |
| メンバー | 岩崎 敬 / 統合科学技術コース非常勤講師 |
| 民谷栄一 / マテリアルサイエンス研究科教授 | 末永 聡 / 知識科学研究科助手 |
| 中森義輝 / 知識科学研究科長・教授 | 高木里実 / 知識科学研究科 博士後期課程 |
| 小林俊哉 / 科学技術開発戦略センター助教授 | 村田康一 / 知識科学研究科 博士前期課程 |

セミナー&シンポジウム

JAISTフォーラム2006 -知識創造と社会革新- 2DAYS!

Knowledge Creation and Social Innovation 11月10日

国内外の教授を招き、本学の中講義室で「Knowledge Creation and Social Innovation」についてのセミナーが実施された。当日は90名を超える参加者で会場は埋め尽くされ、始終熱気につつまれていた。

知識創造をテーマに、科学技術開発センター特任教授・Andrzej P. Wierzbicki氏と、一橋大学教授・野中郁次郎氏をはじめとする本COEアドバイザリー・ボード4名の計5名による講演が行われた。組織や研究現場における知識創造プロセス、システム方法論に関する講演内容に、詰めかけた学生や教職員は熱心に耳を傾け、活発な質疑応答が繰り広げられた。

【講演者と演題】

■Andrzej P. Wierzbicki (JAIST)
Knowledge Sciences and Nanatsudaki Model of Knowledge Creation Processes

■Robert Kneller (The University of Tokyo)
Knowledge Creation and Application in a Local Context: Cooperation with local industry and creation of new companies

■Nico Stehr (Zeppelin University)
Worlds of Knowledge and Democracy: Is Civil Society a Daughter of Knowledge?

■Michael C. Jackson (The Business School at Hull)
Reflections on Knowledge Management from a Critical Systems Perspective

■Ikujiro Nonaka (Hitotsubashi University)
The Knowledge-Creating Company: Strategy, Ba, Leadership Strategy-as-Distributed Phronesis



多彩な講師陣によりグローバルな「知の交流」が行われた。

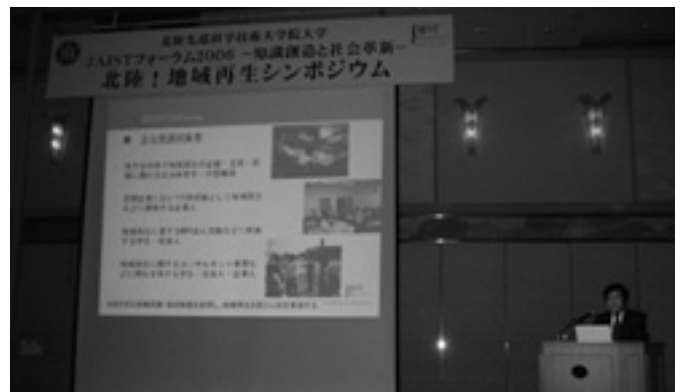
北陸! 地域再生シンポジウム 11月13日

ホテル日航金沢において「北陸! 地域再生シンポジウム」を開催。地域社会や企業のイノベーション創出を担う人材の育成や研究に関する本学の取り組みや、北陸地域との連携プロジェクトの事例を紹介した。自治体、地元企業、NPO関係者、そして本学学生・教職員など、定員を上回る235名の参加者が集った。

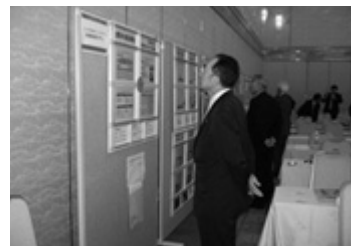
第1部では「企業と社会のイノベーション」をテーマに、知識科学研究科教授・近藤修司氏がMOT改革に関する基調講演を行った。続いて、七尾市長・武元文平氏による、地域経済活性化のための人材育成の試み「のと七尾人間塾」の紹介など、いしかわMOTメンバーによる講演と活発なパネルディスカッションが行われた。

第2部では内閣府地域再生事業推進室企画官・木村俊昭氏が全国で取り組んでいる地域再生の先駆的事例を紹介した。また、本学教員、学生などが地域再生への取り組みを紹介し、新たな地・学連携の可能性を広げた。

会場で行われたポスターセッションでは、能美市、加賀市の地域再生への提案など、17グループの出展があった。最優秀賞には地域再生システム論講座から、「バイオマスを利用した一次産業の活性化と地域再生 加賀市の北前魂」のグループが選ばれた。

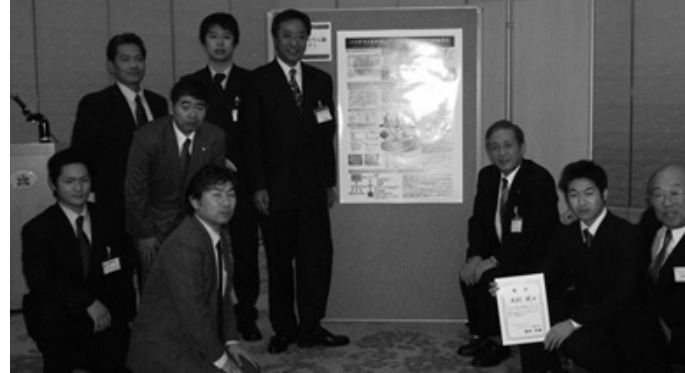


今年度の地域再生システム論をまとめる中森義輝教授。



内閣府・木村俊昭氏による講演「地域再生システム論 これからの展望」。

ポスターセッションの模様と受賞者のみなさん。



KEY WORD 「JAISTフォーラム」とは?

JAISTフォーラムは、本学の研究の取り組みを地域、日本そして世界に発信することを目指し開催している。今年度のフォーラムでは、「知識」をイノベーションとつなげる「知識創造」「知識マネジメント」の研究についての取り組みをひろく発信することを目的とし、4日間の日程(11/10~13)で実施された。COE NEWSで紹介したイベント以外にも、北陸MOT改革セミナーや地域再生システム論・グループ発表などが行われた。

産官学連携事業を推進!

クスリのアオキ(白山市)と本学科学技術開発戦略センターとの共同研究

本取り組みは、株式会社クスリのアオキ(以下クスリのアオキ)、石川県産業人材政策室、本学科学技術開発戦略センターが一体となって進めている産官学連携事業の一環である。

クスリのアオキは石川県を中心として、富山県、福井県および新潟県にドラッグストアをチェーン展開し、北陸エリアではトップシェアを占める。共同研究テーマは、「年15%の売上増、5年後に店舗数倍増(100店舗体制から200店舗体制へ)」を目標とするクスリのアオキの成長戦略を支えるための人材育成について。研究の背後には、創業以来137年の伝統を守りながらも、新しいことに挑戦し続けていくための仕組みづくり、いわば「伝統と革新(イノベーション)」の両立への関心がある。

この共同研究では、クスリのアオキ管理部教育チームの方々、本学に隣接するいしかわクリエイトラボの一室で、体系的なキャリア・パスの確立とそれに対応した研修制度の再構築を目的とした議論を実施。現在は人材教育のあり方の議論が主だが、今後は店舗が倍増したクスリのアオキの未来像を明確にしつつ、来年度(2007年4月)からの施行を見据えた具体的な研修制度再設計の議論を行っていく予定だ。

本取り組みが成功するか否かは、本学が学問の視点を持ち続けながらも実践面でどのように目に見える貢献ができるかにかかっている。そのことを常に意識しながら、本学ならではのユニークな産官学連携システムの確立を目指していきたい。(レポーター:知識科学研究科 吉永崇史)



歴史から経営方針、人材育成システムなど、企業が持つ要素をさまざまな手法で分析。

KEY
WORD

本COEが手掛ける「人材育成プロジェクト」

本COEでは、企業との連携以外にも知のコーディネータ育成の知識・ノウハウを活かして、さまざまな人材育成プロジェクトに取り組んでいる。本学においては3研究科(知識科学研究科・マテリアルサイエンス研究科・情報科学研究科)にまたがる分野横断型教育を実践する「統合科学技術コース」や「東京MOT(技術経営 Management of Technology)コース」において、社会や企業のイノベーションを担う人材育成のためのプログラム開発を進めている。また、石川県と連携して、社会人を対象に企業事例を通じて実践的思考力・判断力を高める「石川経営天書塾」を支援。今年で第2期目になる。本COEは本塾において講師派遣だけでなく、さまざまな地元企業のケース教材の開発を手がけている。

○統合科学技術コース

http://www.jaist.ac.jp/coe/ist_course/index.J.htm

○東京MOTコース

<http://www.jaist.ac.jp/ks/mot/>

○石川経営天書塾

<http://www.pref.ishikawa.jp/tensyo/>

COEリーダーは考える②

世界の地域に貢献する 中森 義輝

21世紀は知識社会と言われており、知識科学研究科は「知識」をいち早く学問のターゲットとした世界で最初の研究科です。理系・文系の枠を超えた幅広い知識、自由な発想と総合的判断力、深い洞察力やシステム思考の能力を有し、「知識創造」の担い手となる人材、すなわち「知識社会のバイオニア」を組織的に養成しています。企業における情報技術を援用した知識マネジメントあるいは技術マネジメントに関する研究と教育は社会的に認知されてきました。この経験を基礎に、本年度から「地域再生システム論」の理論化と実践、地域再生の担い手となる人材育成事業に着手しました。知恵や知識に基づいた再生計画手法の開発と人材育成により、地域社会に貢献したいと考えています。

今秋実施の地域再生システム論の講義においては、中央政府などから10名の講師をお招きし、地域再生の方法論、各種法律・規制、あるいは補助金、そして成功事例の紹介をお願いしました。受講者は本学学生37名に加え、北陸地域の行政担当者34名、産業界とNPO関係者などから38

名が参加され熱心に討論を行いました。また、参加者は6つのグループに別れ、バイオマスタウン、観光産業、伝統産業、都市再生、NPO人材育成、そして地域医療・福祉に関する地域再生計画を立案する演習も実施しました。行政関係者が大勢参加されましたから、実行可能な計画案を作成することができました。これから本講座の参加者が、科学技術と社会を結びつける「知のコーディネータ」として活躍されることを期待しています。

中森 義輝 NAKAMORI Yoshiteru

北陸先端科学技術大学院大学 科学技術開発戦略センター長。知識科学研究科長・教授。工学博士。2003年10月の本COEスタート時から、本COEの拠点リーダーを務める。専門はシステム方法論、環境科学、エージェント・シミュレーション。



21世紀COEプログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」

ホームページのご案内

<http://www.jaist.ac.jp/coe/indexJ2.htm>



本COEプログラムの概要はもちろん、推進プロジェクト、イベント、出版物情報などを、日本語と英語で発信しています。トップページでは、本COEで育つ「知のコーディネータ」が、異分野の人々が集う混沌とした社会へ挑んでいく姿を表現。科学技術開発戦略センターでは、このプログラムに参加した学生たちが、さまざまな人が持っている知識を理解するために自ら「積極的摩擦」を興し、必要な知をコーディネートしながら、最後にはイノベーションのための活きた知を生み出すことを目指し、このプログラムを推進しています。

〔主なコンテンツ〕-日本語版-

◆プログラム概要

本COEプログラムの目的、研究、人材育成プログラムをご紹介します。

◆プロジェクト

本COEの4つの柱と、各推進プロジェクトをご紹介します。

- ・知識科学の確立「知識創造の理論研究とツール開発」
- ・イノベーション研究「分野横断研究の推進、新しいイノベーション教育の基盤構築」
- ・イノベーション教育「イノベーションを担う人材の育成」
- ・拠点形成活動「情報基盤、評価システム、国際交流」

◆イベント

本COEプログラムが開催したフォーラムやセミナーなどをご紹介します。

◆出版物

成果物として、書籍および国際関連学会の定期刊行物をご紹介します。

◆広報誌

本誌のPDFデータを掲載。デジタル版「ナレッジ・ビート」が楽しめます。

◆COEセンター [科学技術開発戦略センター]

センターの取り組みや、COEスタッフをご紹介します。

編集後記

夏から晩秋にかけて、サイエンスカフェ、「地域再生システム論」講座、JAISTフォーラム、シンポジウムと多くのイベントが開催され、地域や企業の方、さまざまなキャリアをもつ方々によって、積極的な「知の交流」が行われました。本COEで学ぶ「知のコーディネータの“卵”たち」も日々鍛えられ、たくましく成長しています。学内はもちろん、地域との交流から一步一步発展し、彼らが新しい知を社会に生み出してくれることを願っています。

科学技術開発戦略センター

Knowledge-Beat [ナレッジ・ビート] Vol.2 2006 冬

- 発行 2006年12月
- 発行所 国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学 科学技術開発戦略センター
〒923-1292 石川県能美市旭台1-1 (知識科学研究科棟 II・7階)
◇科学技術開発戦略センターホームページ
<http://www.jaist.ac.jp/coe/indexJ2.htm>

■制作 株式会社バステララボ

○本誌に関するご意見・お問合せ

TEL:(0761) 51-1839 FAX:(0761) 51-1767 E-mail:coe-secr@jaist.ac.jp



Vol.3 2007 春

〔特集〕積極的摩擦で「活きた知」を生み出せ!